



ささの ひろのぶ 笹野 公伸 教授

～ 病理診断学分野 ～

講義題目

"たかが形態、されど形態"

略歴

1982年3月 東北大学医学部卒業

1986年3月 東北大学大学院医学研究科修了

1986年4月 東北大学医学部助手

1998年5月 東北大学医学部教授

1998年8月 東北大学医学部附属病院病理部長（併任）

1999年4月 東北大学大学院医学系研究科教授

2012年4月 東北大学医学部医学科長（併任～2015年3月）

2020年4月 東北大学附属図書館医学分館長（併任）

2022年3月 退職

笹野公伸教授は、1982年に東北大学医学部を卒業され、その後1986年に医学博士を取得後、1998年から東北大学大学院病理診断学分野教授、東北大学病院病理部長に就任され現在に至られています。

笹野教授は一貫して今回の最終講義のメインテーマでもあります“形態学”に基づき種々の疾患、特に副腎皮質疾患、神経内分泌腫瘍を中心とする内分泌疾患、乳癌、子宮内膜癌などの性ステロイドホルモン依存性腫瘍の研究を精力的に進めてこられました。副腎皮質疾患では、複雑な形態像を呈する副腎組織の中でどの細胞がどのような内分泌活性を有するステロイドホルモンをどれくらい合成しているのかを初めて示されました。笹野教授は更にこれら一連の研究成果を基に副腎皮質疾患の内分泌機能異常に基づく病理学的分類を初めて提唱しました。現在、この研究成果は副腎皮質疾患の診断基準の中心をなす概念として確立されました。

一方、笹野教授は乳癌の研究領域において、閉経期以降の女性で何故血中のエストロゲン濃度が低いにも関わらずホルモン依存性の増殖が生じるのか？という研究課題に取り組み、乳癌組織局所でエストロゲンの前駆体であり血中に豊富に存在する副腎皮質網状層由来のDHEAなどの男性ホルモンが、癌組織内でアロマターゼ他によりエストロゲンに転換されて腫瘍細胞を増殖させている事を初めて明瞭に示されました。このホルモンの作用動態は従来の“Endocrinology”に対し“Intracrinology”と命名され、現在閉経期以降のエストロゲン受容体陽性の乳癌患者の内分泌療法の主流となっているアロマターゼ阻害剤の作用機序と治療効果を初めて明確に示されました。そして、この研究成果から2002年に笹野教授は欧米以外で初めての開催となった国際アロマターゼ会議を京都で主催されました。更にその後の検討で、この“Intracrinology”は乳癌ばかりでなく、閉経期以降の女性で発症頻度が増加する性ステロイド依存性の骨粗鬆症、動脈硬化などの病因／病態にも深く関与する事が報告されるなど、大きな注目を集めて現在に至っています。

また、神経内分泌腫瘍に関して腭消化管に発生する腫瘍では腫瘍細胞の増殖動態が患者の臨床予後に密接に関係するという、現在の神経内分泌腫瘍の疾患分類の樹立に国際共同研究を通して密接に関わりました。

以上の領域を中心に、笹野教授の研究活動はh-index 105 (2021年10月時点)と非常に高い評価を受け

ております。更に笹野教授は Endocrine Related Cancer, Endocrine Review, Journal of Steroid Biochemistry and Molecular Biology など評価が極めて高い種々の学術誌の Editor/Associate Editor として学術誌の編集にも密接に関わってきました。加えて上記の研究領域で ASCO-CAP/ENETS などの国内外の clinical guideline, WHO 疾患分類、取り扱い規約などの中心メンバーとしても活動し、研究成果の臨床への応用とその均霑化の点でも多大なる貢献を果たしました。